

2017年3月26日、病気が見つかった時、この日を生きて迎えることができるとは、夢にも思っていないでせう。ちょうど2年前の15年3月26日、外来の診察をしている途中に気分が悪くなり、大量の下血があったのが始まりでした。そして、検査の結果、広い範囲に転移を伴う進行性の胃がんが見つかったのです。

その段階の診断は「治療をしなければ余命半年」。がん治療に長く携わってきましたから、頭の中では「よくてあと1年ぐらいいかな?」と思ったのを昨日のこのように思い出します。2年という長いようにも感じますが、今から振り返ればあっという間でした。抗がん剤治療、手術、放射線治療と怒濤のように治療が続き、その効果や副作用に一喜一憂したことは数え切れません。それでも家族、仲間、そして医療スタッフが、必ず周

周囲の支えが闘病の力

発覚から2年を生きる

西村 元一

金沢赤十字病院副院長

ドクター元ちゃん
がんになる



丸山博撮影

りに一緒にいてくれ、支えになってくれました。手術後の集中治療室で、合併症を発生して状態が安定しな

ったときは、出口が見えなくなっただけでは行き詰まってしまう夫婦だけでは行き詰まってしまうのでした。そのたびに仲間

たちが面会に来てくれて話を聞いてくれたり、さりげなく足のマッサージをしてくれたりし、どれだけ感謝したか分かりません。抗がん剤治療による味覚障害がひどいときも、いろいろな食事を考えて作ってきてくれて、それを口にしたときは本当に涙が出そうになりました。一緒に働いたことがある看護師が代わる代わる顔を出してくれたことにも勇気づけられました。

そして、調子がいいときも悪いときも、どこへ行く時もずっとそばにいてくれる妻には感謝の言葉しかありません。皆に支えられた環境のおかげで治療に専念でき、「自分の経験を皆に伝える」「マギース(英国で生まれたがん患者のための院外の相談施設)のような残された人生の目標の実現に没頭することができました。そう考えると、自分は本当に「人」に恵まれたと思っています。多くの場合、闘病中は家族、近所の人、同僚など、さまざまな人たちの支えがあると思いますが、十分な支えがある人ばかりではありません。また、もし支えがあったとしても、闘病が

にしむら・げんいち 1958年金沢市生まれ。83年金沢大医学部卒。金沢大病院などを経て、2008年金沢赤十字病院第一外科部長、09年から現職を兼務。13年から、がん患者や医療者が集うグループ「がんとむきあう会」理事長。